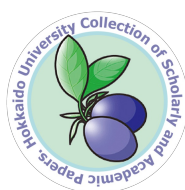




# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                             |
|------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 助動詞としての「ものだ」の認定                                                                             |
| Author(s)        | 張, 力丹                                                                                       |
| Citation         | 研究論集, 22, 1 (左) -13 (左)                                                                     |
| Issue Date       | 2023-01-31                                                                                  |
| DOI              | <a href="https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.l1">https://doi.org/10.14943/rjgshhs.22.l1</a> |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/87856">https://hdl.handle.net/2115/87856</a>           |
| Type             | departmental bulletin paper                                                                 |
| File Information | 03_rjgshhs_22_p001-014_l.pdf                                                                |



# 助動詞としての「ものだ」の認定

張 力 丹

## 要 旨

本稿は〈一般性〉や〈当為〉など特殊の意味用法が派生した「ものだ」が助動詞として捉えられる可能性を検討した。きちんと活用ができるかどうかはその認定にあたって重要なポイントであると位置した。従来の助動詞「だ」「である」の活用体系を考察し整理したとき、「ものだ」および「ものである」は単なる「だ」と「である」の活用体系を受け継ぐことではなく、相違点がありながら各自の活用体系が形成された。また、「ものだ」と「ものである」は並行的に各自の活用体系を成しているのではなく、補充法により補い合ったところ整った活用体系ができたわけである。このように、従来根拠が不十分なまま「助動詞化した」として捉えられてきた「ものだ」に活用体系を構築したことで、「ものだ」を助動詞として捉えることができるという旨を示した。

## 1, はじめに

助動詞化した<sup>1</sup>「ものだ」についての本格的な研究は、おそらく寺村（1984）に始まる。寺村（1984）は、「P ハ Q モノダ」という型をとりながら〈本性、本質〉を表す「ものだ」が形式名

<sup>1</sup> 寺村（1984）を典拠とする用語である。「形式化」した「モノ」が「ダ」と結びつき、ムードの助動詞化したものと見るかはやはり何らかの構文的特徴によるほかない（寺村 1984：299）。また、「P ハ Q モノダ」の文型をとりながら助動詞として働いているモノダの構文的特徴について、寺村（1984）は以下のようなテストを想定している。

「Q の部分を何かかんたんな形容詞で置きかえてみて、その場合と当の Q モノダのモノダの意味が変わらない場合は、Q モノダは Q モノ + ダ と見ることにし、そうでなく、Q モノダのモノダの意味が、この形でしか表わせない場合、そのモノダは一体化したもの、助動詞化したものと見る。」（寺村 1984：300）

(1) a. 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるものだ。(本性)  
b. 病人はわがままなものだ。(本性)

詞としてのモノがダと結びついた構造とし、助動詞とは認めていない<sup>2</sup>。また、助動詞化した「ものだ」の意味と用法を以下の4つに分類している。

① 理想の姿、当為を表わす。

「墨はゆるゆると、すずりの表面をなでるような気持ちですものです。力を入れて、ごしごしするものではありません。」

② 既に起った事件、現象、状態についてどういう成り行きでそうなったのか、その原因は何か、その背後の事情は何か、などを解説的に述べる。

「このガラスの切り口を見ると、だれかが、ダイヤモンドか何かの固いもので切ったものらしい。」

③ 追想、なつかしさをこめての回想。

「1964 年、第一回新興美術展が開かれたときは独立美術の連中多数が参加して、新しい絵画運動の精神にもえたものであった。(後略)」

④ 驚き。ある事実（改めて）驚き、あるいは一種の感慨をおぼえたときの表現。

「(前略) 根本は、若いときの彼の顔を思い出し、この男も年を取ったものだなと見ていた。敗戦後の苦難と貧乏が堀川をよけいに老けさせたのであろう。」

寺村（1984）の分類はそののちの「ものだ」の研究において基本的に受け継がれている。多少違いが見られるが、以上のような独特の意味が派生してきた「ものだ」を助動詞化したものと認められている。「ものだ」が派生した意味用法、およびその意味用法間の連続関係は注目されることに対して、形式名詞「もの」にコピュラ「だ」が後続したもの（以下は「もの+だ」で示す）と区別して一つのまとまりとして捉えられる形態論的な要因が避けられているのである。すなわち、以上に引用した4つの派生した意味が読み取れるとしたら、助動詞化した「ものだ」と認めればよいという意味論的な判断基準が先行研究で見取れるが、「ものだ」と「もの+だ」とを別の品詞にした形態論的な理由はどこにあるのが問題になる。

---

⇒ (1a) の「モノダ」は、名詞モノ+ダ

(2) a. 病人は看病人のいうとおりおとなしく寝ているものだ。(当為)

b. 病人はおとなしいものだ。(本性と解釈され、当為とは解釈されない)

⇒ (2a) の「モノダ」はムードの助動詞

(寺村 1984 : 300)

<sup>2</sup> P がその一文中に存在する「P ハ Q モノダ」は、必ずしも〈本性、本質〉を表すわけではない。

(3) 男ノ子ハ泣カナイモノダ。(寺村 1984 : 299)

「P ハ Q モノダ」の形をとっている(3)が、〈当為〉、または〈理想の姿〉を表して、助動詞化した「ものだ」と判定されることもあると寺村（1984）は指摘している。

それで、「ものだ」が助動詞と認められるかどうか、そしてその形態論的な根拠はなんだろうかということを本稿の一つ目の問題点としている。また、「ものだ」と「ものである」とは文体の違いがあることがよく知られているが、「ものである」は連体修飾部になれるが「ものだ」はなり得ないことについて、今日まで両者に形態論的な区別をしないまま「ものだ」の研究をなされてきたのである。従って、「ものだ」と「ものである」との形態論的な相違を見出すことを本稿の二つ目の目的としている。

## 2. 従来の「ものだ」研究の問題点

本節は従来の研究における「ものだ」についての問題点を具体的に述べていく。

寺村（1984）をはじめとして独特な意味を派生した「ものだ」が助動詞化したものとして認められている一方、その「ものだ」を取り立てて助動詞と認める必要がない、または認めがたいとする考え方も少なくない。橋本文法を基盤とする学校文法などは「そうだ」「ようだ」などを助動詞として認めている。しかしながら、その助動詞の範囲に「ものだ」「ことだ」のような形式名詞とコピュラとの複合で構文化した複合辞が含まれていない。

助動詞を一つの品詞として認めるかどうかの問題になることに加え、現代日本語におけるその文法形式の範囲も諸説がある。本稿では助動詞を一つの品詞として認めたうえで、問題点についての検討を始める前に、まずは時枝（1950）における助動詞の定義を取り上げておく。

助動詞は辞に属するものとして、辞の一般性に於いて、他の感動詞、接続詞、助詞と同様に、話手の立場の直接表現であり、従つて、話手以外の思想を表現することの出来ないものであり、常に詞と結合して始めて具体的な思想の表現となることに於いて共通するのであるが（中略）助動詞は、話手の立場の中、何等かの陳述を表現するものであり、そのことのために、助動詞は、多くの場合に活用を持つことになるのである。

（時枝 1950：153-154）

すなわち、ア）独立語でなく付属語、イ）陳述を表現すること、ウ）活用を持つこと、というのは助動詞を認定するにあたっての必要条件であると考えられる。「活用する付属語」（寺村 1984：50）や「辞に分類される自立的でないもののうち、活用するもの」（加藤 2006：35）など助動詞についての定義より、3つの必要条件と言っても、形態論的条件はア）とウ）であり、イ）は意味的条件であることがわかる。

（1）a. 人間はみな寂しいものだ。

b. 遅れそうなときは、まず連絡を入れるもんだ。

c. 夏祭りには毎年ゆかたで出かけたものだ。

(日本語記述文法研究会編 2003: 218)

(2) 早いもので, 先生が亡くなって十二回目のお盆です。

(BCCWJ, 書籍, 芸人好み弁当, 吉川潮 (著), 下線は筆者)

日本語記述文法研究会編(2003)の論述に従えば, (1a)は〈本質・傾向〉, (1b)は〈当為〉, (1c)は〈回想〉を表す。いずれも「ものだ」の派生した意味用法である。例文(1)の「ものだ」は付属語であり, またその前の連体修飾部と結合して主題について陳述を表現するものである。そして「時間の経つのがはやいものだ」というような感慨や感嘆を込めた(2)の「早いもので」は, 「もので」が形式名詞「もの」に格助詞「で」が続くとみなすことより「ものだ」の連用形と認めるほうがつじつまが合うのではないかと考えられる。このように, 特別な意味が派生した「ものだ」は助動詞と認めるのは可能かつ妥当であることになる。

〈理想の姿, 当為を表す〉などの意味用法を有する「ものだ」を助動詞として認めたいことがあるのは, ア)とイ)でなくおそらく活用にあると思われる。「もの+だ」の歴史的な変遷により派生した「ものだ」は, 活用が「だ」の活用をそのまま受け継いだもので, 一つのまとまりとしての助動詞と認めなくても済むわけである。寺村(1984)のような先行研究では「助動詞化した」という言い方を用いており, 複数の形態素がくっつけて一つの固まりになるという構文化の観点から「ものだ」を捉えるのである。しかしながら, 「ものだ」は後で詳述するが整った活用体系を持っているため, 「助動詞化した」ものではなく, 助動詞と認めても妥当であると考えられる。本稿は整った活用体系を持つこと, そして「だ」の活用体系との相違という二点を「ものだ」が助動詞と認められるにあつての重要なポイントとして捉えていく。

また, 実際の使用には「ものだ」のみならず「ものである」も現れてくるが, 両者の違いはただ文体にあるかということも問題点となる。「ものだ」が連体形にならないことに対して, 「ものである」に体言を連ねることができることから知られるように, 手軽に結論付けることができない。現在「ものだ」と「ものである」が混在したまま研究がなされている「ものだ」に関して, 従来の繫辞の体系を整理し明らかにしたうえで, 「ものだ」と「ものである」の活用体系を構築することを本稿の目的としている。

### 3, 「ものだ」の活用の形態論的分析

本節は, 先行研究における「だ」「である」「です」の活用体系の構造を考察したうえで, 「ものだ」「ものである」「ものです」の活用体系を構築する。

### 3.1 「だ」「である」と「です」の活用体系

橋本文法を基盤とする学校文法、時枝（1950）および寺村（1984）における「だ」の活用についてそれぞれ表1、表2、表3のように示している。

表1 【学校文法における断定の助動詞であるダの活用表<sup>3)</sup>】

| 活用形 | 未然形 | 連用形 <sup>4)</sup> | 終止形 | 連体形   | 假定形 | 命令形 |
|-----|-----|-------------------|-----|-------|-----|-----|
| だ   | だろ  | だっ／で／(に)          | だ   | (な) の | なら  | —   |

学校文法における活用形の認定、命名が無原則で一貫性のないところが多数の研究者により指摘されている。「ウに続く」ものは未然形に、「タ／ナイに続く」ものは連用形に帰属させられている。

表2 【指定の助動詞<sup>5)</sup>「だ」（時枝 1950：155）】

| 活用形<br>語 | 未然形 | 連用形   | 終止形 | 連体形 | 假定形 | 命令形 |
|----------|-----|-------|-----|-----|-----|-----|
| だ        | で   | と・に・で | だ   | の・な | なら  | ○   |

「ない」が動詞において一般に未然形につくのを原則とするところから、助動詞「ない」の接続する活用形を未然形の「で」とした（時枝 1950：157）。この中、「に」「と」「の」は従来助詞として取り扱われていたものであるが、時枝（1950）では、「元気に、愉快地、働いてゐる」「花が雪と散つてゐる」「僅かの御礼しか出来ない」の例から知られるように、そこには明らかに陳述性が認められるため、助動詞と認めるほうが正しいと述べている。また、上の表2に掲げられた各活用形は、その起源においては、それぞれ異なった体系に属する語であったが、今日においては、一つの体系として用いられるようになったものであるという指摘がある（時枝 1950：155）。中村（2022）では時枝の考えに従い、未然形の「で」は「にて」が転じた格助詞由来、連用形の「で・に」も格助詞からきたもの、連体形の「な・の」は純粋な「だ」の語形変化したもの、假定形の「なら」は古語の「なり」の系統を引き継ぐ形であると述べており、「だ」の活用体系は異なる系統の形態を組み合わせで成り立つ点から補充法であると主張している。

<sup>3)</sup> 寺村 1984 より引用したもの。

<sup>4)</sup> 連用形を「タに続く」「テ、ナイに続く」およびそれ以外のものという三つに分けられて、それぞれ「だっ」「で」「(に)」に対応している。

<sup>5)</sup> 指定の助動詞は、話手の単純な肯定判断を表はす語である。（時枝 1950：155）

表3 【寺村（1984）における判定詞ダの活用表（p.49）】

|    |            |                 |
|----|------------|-----------------|
| 確言 | da 〈基本形〉   | datta 〈過去形〉     |
| 概言 | darô 〈推量形〉 | dattarô 〈過去推量形〉 |
| 命令 | —          | —               |
| 条件 | nara 〈レバ形〉 | dattara 〈タラ形〉   |
| 保留 | ni 〈第1連用形〉 | —               |
|    | de 〈第2連用形〉 | dattari 〈タリ形〉   |
|    | na 〈第1連体形〉 | —               |
|    | no 〈第2連体形〉 | —               |

寺村（1984）は、「活用ということを、コトが現実の文として発せられるときに、そのコトのかなめとなって末尾に位置する述語としての用言が、いろいろな形をとる、ムードの一次的な発見という側面から捉えた」（寺村 1984：58）から出発して表3の体系をつくったわけである。すなわち、活用語尾をムードという構文要素の一つの形式とみるわけで、「確言形」「概言形」および「命令形」を「言い切りのムード」、「条件形」を「あとの文と関係づけるムード」、「保留形」を「あとの文（主節）がムードを表すまで態度を保留するムード」として寺村（1984）は捉えている。明確にムードから出発して活用体系を作ろうとしたのは寺村（1984）だけでなく、実はそれ以前の三上（2002）<sup>6</sup>においても同じ考え方である。ここで三上（2002）における「だ」「である」「です」の活用体系を取り上げたい。準用詞として捉えられている「だ」が「文章体では de alu という連語になるが、da と de alu のどちらを原形としても不公平になりそうだから、両方を立てて（というより両方を譲らせて）相互的な短縮形、還元形という名前を与えられている（三上 2002：29）。

表4 【三上（2002）の内容に基づいて筆者がまとめたもの】

|            | 中立形            | 終止形    | 連体形    | 推量形    | 条件形      | 完了形     |
|------------|----------------|--------|--------|--------|----------|---------|
| 短縮形 da     | de             | da     | na     | dalô   | nala     | datta   |
| 還元形 de alu | de ali/de atte | de alu | de alu | de alô | de aleba | de atta |

三上（2002）は、ムウ德的またはムウド-テンス的な種々の用法に応じて、語形変化が起こっていることを見たとえで結果たる形態を分類しているため、基本語幹と完了語幹との二つを考えて、「だ」の活用にも動詞の形態の分類方法に従い「完了形」を設定している。すなわち、三上（2002）では活用体系を構築する際、ムードとテンスとも配慮に入れて総合的に考えたので

<sup>6</sup> 三上（2002）は三上章が 1959 年に執筆し、東洋大学に提出した博士論文『構文の研究』の全文である。



ある。また、「である」について三上（2002）は、このような活用表は対照のみを示したもので、還元形は添動詞<sup>7</sup> *alu* の変化そのままであるから表示の必要がないと述べている。さらに、三上（2002）はムウドの四段階を想定したうえで固有のムウドを持たないものを中立法と考え、活用形式に固有のムウドもテンスも持たないものを中立形として設定している。その中立形はいわゆる連用中止法や連用テ形に相当すると思われる。しかし、動詞を語幹と活用語尾とを分けて細やかに分析することはない。表4に示したように、列挙するのみで、「だ」および「である」の語幹と活用語尾とが膠着したままである。下表の「デス体」も同様に語幹と活用語尾とが区別されなく放置されたままである。

表5 【三上（2002）の内容に基づいて筆者がまとめた「だ」の「デス体」】

|     | 中立形    | 終止形  | 推量形   | 条件形      | 完了形    |
|-----|--------|------|-------|----------|--------|
| デス体 | desite | desu | desyô | desitala | desita |

「です」の成立を追うなら、語源説では、「であります」起源説と「でございます」起源説とがより支持を得ているようである。「であります」「であります」のようなすでに形が崩れたものが「であります」に先行して現れているため、「であります」起源説が支持されがたい一方、現代語の「です」は「でござります」から「でござんす」を経て、「でござんす」や「でがんす」、「であんす」、そして「でやす」「でえす」「です」のような形へと変化したという由來說がより有力である（青木 2020：224-225）。「です」の出現は中世後期の狂言にさかのぼり、名乗りや改まった堅い雰囲気の中で発話する場面で用いられていた（青木 2020）。現在丁寧語として使われた「です」とはまったく異なっている。しかし、青木（2020）では「でございます」から崩れた形である「です」が、「丁寧さ」を表す文体として、「でございます」と並んで（一段低いとはいえ）、「です体」として確立する過程を想定するのはいささか難しい（青木 2020：250）と考えているため、「です」がコピュラ（copula）の「で」を介して、丁寧の「ます」に続く形で作り出されたものとして捉えられている。「で」と「ます」は直接つながらないので、形式動詞を介在させることを想定して、「で+あり+ます」と「で+ござり+ます」のいずれでも「です」の文法化を説明しても通じると青木（2020）は述べている。すなわち、「であります>です」や、「でございます>です」のような無理やり直接的な親子関係を見出し論じる必要がなく、「です」が丁寧を表す普通の語として作り出された形式と位置付けられている。つまり、「です」の

<sup>7</sup> 三上（2002：17）は、補助的に使われる自立語、したがってやや形式化している自立語を添え語（補助用語、準動詞、形式名詞、吸着語の大部分）と呼ぶことにすれば、*dasu*, *sugilu* の類は添動詞で、*sidai* は添名詞であり、*nai* は添形容詞として働くこともあると述べている。



由来を遡る必要がなく、「だ」と「である」という通常の表現に対して「です」を敬讓の表現である丁寧を表すことばとして捉えればいいということである。

以上で先行研究を概観したが、「だ」や「である」の活用体系は研究者によってそれぞれ違っており、構築の基準が恣意的であると言ってもいい。本研究はテンスやムードを考慮に入れない時枝（1950）の活用を基盤にして「だ」の活用体系を試みたい。時枝（1950）では形容動詞を立てないため、従来形容動詞の語尾と考えられる形式がすべて表2に所属させる。ここでは指定の助動詞のみを考えると、以下のような活用体系を提示する。

表6 【「だ」の活用体系】

| 語幹  | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連体形   | 假定形  | 命令形 |
|-----|-----|-----|-----|-------|------|-----|
| d-  | -e  | -e  | -a  |       |      | —   |
| ※n- |     | -i  |     | -a・-o | -ara |     |

「にてあり」が分岐して、一つは「であり」を通じて「だ」になり、もう一つは「にあり」を通じて「なり」になった。その分岐した2系統の活用が混在して、現代日本語における助動詞「だ」の活用体系を形成したと考えられる。そのため、「だ」の語幹には「d-」と「n-」との2つがあるのである。

また、「ものである」の語幹と活用語尾との認定に関しては、「もの」を語幹とし、「である」を活用語尾とする考えがある一方、「もので」を語幹とし、「ある」を活用語尾とする立場もある。このような二つの異なる考えはあくまでも「である」についてどう認定するかという問題に行き着くと思われる。中村（2022）では、「である」は接語「で」と自立語「ある」との連結としての分岐型と、接語「で」と準接語「ある」の2形態からなる融合型という二つに分けられる。後者の融合型の「である」を繋辞とし、「である」は「de」と「aru」が複合した2形態の「de-aru」となったのち、異分析により「dear-u」となり「dear-」が語幹を形成した（中村2022:98）。すなわち、繋辞としての「である」は「で」と「ある」の融合型で、「dear-」が語幹とされている。「ものである」の活用体系は中村（2022）を援用する。語幹を「dear-」とし、表7のようにまとめる。

表7 【「である」の活用体系】

| 語幹    | 未然形     | 連用形 | 終止形 | 連体形 | 假定形     | 命令形 |
|-------|---------|-----|-----|-----|---------|-----|
| dear- | -a(-zu) | -i  | -u  | -u  | -e(-ba) | -e  |

丁寧体の「です」の活用体系を表8のように示している。その未然形「で（は）ありません」は異質的なものであるとわかる。中村（2022）では「です」のみが活用を体系化できないとい

う不均衡を解決するために、「です」を「であります」の終止形のもう一つの形態として位置付けている。すなわち、「です」の活用体系の構築が「であります」の活用に求められている。しかしながら、「です」全体を「であります」の終止形のもう一つの形態に位置付けるより、未然形の「de-(-ha)arimasen」のみは「であります」という別系統の未然形からきたものであるという、補充法の考え方のほうが比較的妥当だと考えられる。「だ」と「である」と比べれば、「です」に連体形が許されないのは目立つ点である。命令形がないということは「だ」と同様である。

表 8 【「です」の活用体系】

| 語幹  | 未然形            | 連用形      | 終止形 | 連体形 | 假定形        | 命令形 |
|-----|----------------|----------|-----|-----|------------|-----|
| de- | -(-ha)arimasen | -si(-te) | -su | —   | -si(-tara) | —   |

### 3.2 「ものだ」類の活用体系

まず「ものだ」の活用を考えてみよう。判定詞、いわゆる断定の助動詞としての「だ」は本来命令形がないので、「ものだ」にも命令形がないわけである。「だ」の連体形としての「なの」は、「ものだ」の連体形に当てはまるとしたら「ものな／ものの」になると考えられる。例(3)における「ものなの」に」という逆接を表す形式は、「ものな」が「ものだ」の連体形と認められることがある。しかし、それは普遍性のある用法ではない。そして、「ものの」は「ものだ」と関係なく逆接を表す接続表現である。よって、ここで暫定的に「ものだ」の連体形をなしとする。

- (3) 勉強でも知識でも、本来、必要になれば自分から学ぼうとするものなのに、塾でさせられつけていれば、自分からするようにはならないでしょう。

(BCCWJ, 書籍, 間違ってます, お母さん, 川崎悟郎(著), 下線は筆者)

また、「ものだ」の連用形については、「もので」が使われるのに対して、「ものに」が存在していない<sup>8</sup>。このように、「ものだ」の活用は次のようにまとめられる。

表 9 【「ものだ」の活用(仮)】

| 語幹    | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連体形 | 假定形       | 命令形 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----------|-----|
| mono- | -de | -de | -da | —   | -nara(ba) | —   |

<sup>8</sup> 「ものになる」の用法があるが、それは「ものだ」の連用形と認めず別の使い方とする。

「ものである」は「ものだ」の書きことばとして使われ、両者には文体の違いしかないという考えがよく見られる。もしそれを受け入れるならば、「ものである」の活用が「ものだ」とは完全に対応するはずであるが、実際に考察すればそうではない。まずはその未然形について、「である」の活用に従えば「ものであらず」が想定されるはずだが、現代日本語ではその用法が見られないのみならず、文法的には適切でないといえるだろう。このため、ここで「ものである」の未然形をないこととする。そして、連体形に関しては、「ものだ」と違い、「ものである」をそのまま連体形とすれば不自然とは言えない。命令形と想定できる「ものであれ」は助動詞として使われることがないため、ここではなしとする。

(4) 本来勉強するものである学生がサボってはいけない。

「ものである」は連体形として例(4)のような文法的に適切な文が作れる。そのため、以上のような考えを踏まえて、「ものである」の活用を以下のように示す。

表 10 【「ものである」の活用(仮)】

| 語幹    | 未然形 | 連用形    | 終止形    | 連体形    | 假定形         | 命令形 |
|-------|-----|--------|--------|--------|-------------|-----|
| mono- | —   | -deari | -dearu | -dearu | -deare(-ba) | —   |

「ものである」における接語「で」は、「もの」より「ある」のほうと融合しやすいようにみえる。さて、「ものです」の活用はやや紛らわしいところであるが、表 11 からわかるように、それは完全に「です」の活用を受け継いだものである。

表 11 【「ものです」の活用】

| 語幹      | 未然形             | 連用形      | 終止形 | 連体形 | 假定形        | 命令形 |
|---------|-----------------|----------|-----|-----|------------|-----|
| monode- | -(-ha) arimasen | -si(-te) | -su | —   | -si(-tara) | —   |

#### 4. 補充法による「ものだ」類の活用体系

前節では「だ」「である」「です」の活用形を整理したうえで、「ものだ」類の活用体系を構築することを試みた。しかしながら、それはまだ不完全なものであり、本節では補充法を用いて整った「ものだ」類の活用体系を構築することを目的としている。前述したが、「ものです」の活用体系は完全に「です」の活用体系を受け継いだものであるため、本節では検討対象外とする。

語形変化を範例化する際、語によってある文法機能に別の語幹もしくは語根の形を使うもの

がある。このような現象は補充法 (suppletive) と称されている。よく挙げられる典型的な例であるが、現在形 go, 過去形 went, 過去分詞 gone と表される英語の動詞 go で説明する。英語の動詞 go は、現在形 go, 過去形 went, 過去分詞 gone の現在形 go と過去分詞 gone は同じ語幹から作られた。だが、過去形 went はまったく別の語 wend の古い過去形からきたものである (亀井ほか編 1996: 1306)。ここで改めて「ものだ」と「ものである」との活用表を再掲する。

表 12 【「ものだ」の活用 (表 9 の再掲)】

| 語幹    | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連体形 | 假定形        | 命令形 |
|-------|-----|-----|-----|-----|------------|-----|
| mono- | -de | -de | -da | —   | -nara (ba) | —   |

表 13 【「ものである」の活用 (表 10 の再掲)】

| 語幹    | 未然形 | 連用形    | 終止形    | 連体形    | 假定形          | 命令形 |
|-------|-----|--------|--------|--------|--------------|-----|
| mono- | —   | -deari | -dearu | -dearu | -deare (-ba) | —   |

両者とも命令形がないがそれを含むと、連用形、終止形、假定形と合わせて「ものだ」と「ものである」との6つの活用形のうち4つが対応している。未然形と連体形とが片方しかないのである。

「ものだ」の否定形は所与の事態の成立が望ましくないという意味を表す「ものではない」である。「ものではない」は「ものだ」の否定形だけでなく、「ものである」の否定形にもなるところが興味深い。「である」の未然形は、すでに述べたように、整った活用体系を考慮すれば「で(ない)」でなく「であら(ず)」という形式である。しかしながら、「ものであらず」が想定できるが、派生した意味を持つ「ものだ」の否定形として使われないため、「ものである」の未然形はやはり「mono-de」とするほうが妥当であると考えられる。すなわち、未然形の「mono-de」に「は」という副助詞 (係助詞, 取り立て助詞ともいえる) を挟んで否定の助動詞「ない」をつけてできた「ものではない」も「ものである」の否定形になるのである。このゆえ、「ものである」の未然形の活用語尾は「である」の未然形からきたものではなく、「ものだ」の未然形を援用したものであると言えよう。すなわち、「ものである」の未然形は補充法により「ものだ」から得たものであると考えられる。

さきほど述べた「である」の活用体系における未然形は「dear-a-zu」としているが、これは「本意であらず」(中村 2022: 98) のような古語の残存として存在している。現代日本語において使用頻度が下がってきて、「で(は)ない」が「である」の否定形として広く認められるようになった。すなわち、「で」がそのまま「である」の未然形になったわけである。これは「だ」の未然形が「である」の未然形に埋まったもので、言語の時代的变化を反映していると考えられる。以上のように、「である」の未然形にせよ、「ものである」の未然形にせよ、いずれもそ

れぞれ「だ」および「ものだ」という別系統の未然形から借りてきたものであると分かった。

また、連体形について、「だ」の活用体系に従えば、「ものな」と「ものの」とが想定されるはずである。しかし、「ものな」はごく限られた用法であり、「ものの」は逆接を表す別の語になったため、いずれも「ものだ」の連体形に当てはまらない。

(5) a. 学生は勉強する (ものだ／ものである／ものです)。

b. 勉強する (\*ものな／ものである／\*ものです) 学生は夜遅くまで遊んではいけない。

話し手が望ましいことを提示することで相手の行動を促す (5a) の述部において「ものだ」「ものである」「ものです」のいずれも自然に使われることに対して、その主題を陳述する文を連体修飾部に変えたら成立するのは「ものである」しか選択肢がない。しかも、それは文法的に不適切でなく成立する。連体修飾部で使われた「ものだ」と「ものです」とは明確に文法的に不適切である。このように、「ものである」の連体形「mono-dearu」が「ものだ」の連体形に埋まってしまうと考えられる。この現象は「ものだ」が述部から連体修飾部になった場合に現れるとどまらず、ほかのモダリティ助動詞と複合するときも出てくるのが、それを別の機会に譲りたい。

以上をまとめて、「ものだ」と「ものである」の活用は以下ようになる。

表 14 【補充法による「ものだ」と「ものである」の活用体系】

| 語幹    | 未然形 | 連用形    | 終止形    | 連体形    | 假定形         | 命令形 |
|-------|-----|--------|--------|--------|-------------|-----|
| mono- | -de | -de    | -da    | -dearu | -nara(-ba)  | —   |
| mono- | -de | -deari | -dearu | -dearu | -deare(-ba) | —   |

「ものだ」と「ものである」における未然形と連体形とを太文字で示している。「ものだ」の未然形「mono-de」が「ものである」の活用体系に埋まってしまう、そして「ものである」から連体形「mono-dearu」を借りてきたことで、「ものだ」と「ものである」との活用体系がそれぞれ整ったものになったわけである。

## 5, 終わりに

本稿は「だ」と「である」「です」の活用体系を考察し、整理を行なった。そのうえで、先行研究であまり言及されていない助動詞化した「ものだ」の活用体系を構築した。「ものだ」はそもそも形式名詞とコピュラの複合辞から発展してきているもので、それと「ものである」との活用は確かに助動詞の「だ」と「である」から由来したものである。しかしながら、前者は後

者を完全に受け継いでいるのではなく、継承したところもありながら特有の形式もいくつかあることが分かった。また、「ものだ」類の間、特に「ものだ」と「ものである」との間、連用形、終止形、假定形と命令形がいちいち対応している一方で、「ものだ」の未然形が「ものである」に借りられて、「ものだ」の連体形が「ものである」の連体形に生められた、というプロセスで「ものだ」と「ものである」とが補充法によって各々の活用体系が形成された。このように、独特な意味が派生した「ものだ」を助動詞として認めることが妥当であると考えられる。

(ちょう りきたん・人文学専攻言語科学研究室)

### 参考文献：

- 青木博史（2020）「第 17 章「です」の成立」小川芳樹・石崎保明・青木博史『文法化・語彙化・構文化』p.218-227, 開拓社.
- 加藤重広（2006）『日本語文法入門ハンドブック』研究社.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典』（第 6 巻術語編）三省堂.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語編』岩波全書.
- 中村真衣佳（2022）「繫辞の新しい活用体系」『日本語文法』22：1, p.87-103.
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版.
- 三上章（2002）『構文の研究』くろしお出版.

### 〈付記〉

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。そして、ご指導くださった加藤重広先生に感謝申し上げます。

